

下町文化

NO. 240
2008.1.15

発行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL.(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

特集
移りゆく街並みを記録して
- 定点観測調査16年の軌跡 -

文化財保護強調月間公開講演録
近代深川の商人たち
～ 明治期の米商人 ～

江東歴史紀行
江東区の家

芭蕉記念館新展示
文芸と女性

文化財自主グループ繁盛記
ここにも歴史があった

移りゆく街並みを記録して

一定点観測調査 16年の軌跡



有明3丁目
東京臨海新交通
ゆりかもめの東京
国際展示場駅
の東から北東方
面からを写しています。左側の空地には東京
ベイ有明ホテルや有明パークビル、有明
病院などが建ち、景観は一変しました。

新 2007年12月撮影



旧 1997年4月撮影



夢の大橋から
青梅をのぞむ
97年当時は一面
空き地でした
が、99年3月に
パレットタウン

がオープンし、観光スポットとして賑いを
みせるようになりました。

新 2007年12月撮影



旧 1997年4月撮影



東京オリンピック選手村予
定地の現在です。この風景
も激変するのでしょうか。



定点プロジェクトメンバーによる活動風景

江東区の街並みは今現在も激しく変貌しています。とりわけ再開発が進む臨海地区はわずか1年でガラリと姿を変えてしまうことも珍しくはありません。50年後、100年後には現在の風景がまったく想像もつかないくらい変わってしまうかもしれません。文化財係では、このように移りゆく街並みを資料として未来へ残すため、平成4年から定点観測調査を行っています。

定点観測調査とは幹線道路や川・運河、路地など残したい景観を決めて、定期的に撮影する調査のことです。区内を深川北部・南部、城東北部・南部、臨海の5地区に分け、延べ795ヶ所の街並みを撮り続けてきました。1年につき約160地点ずつ、3年もしくは5年ごとに記録しています。この調査は区で委嘱している文化財保護推進協力員の皆さんにお願いしています。また、協力員の中から12名の有志を募り、定点観測調査プロジェクトを結成し、写真・カードの整理や調査方針について議論をしています。

この調査を始めて今年で16年目を迎えました。この間にも街は大きくその姿を変えています。本号ではこれまで記録した街並みの記録を紹介します。なお、紹介するのは定点プロジェクトのメンバーです。

深川北部（仙台堀川以北）

区道が消えた！

上の写真は元加賀小学校の西に通っていた南北の道路を北方向に撮ったものです。ここには古びた清砂アパートが建っていました。その後、再開発が行われ、高層マンションが建ち、区道も消滅してしまいました。



新 2007年11月撮影



旧 1995年11月撮影

紀長伸銅所

清洲橋通りの交差点から小名木川に架かる西深川橋を写しています。向かって左側のガソリンスタンドは変わりありませんが、右側にあった紀長伸銅所は平成14年に解体され、マンションが建てられました。
（島内康光、日紫喜史、三嶽俊司）



新 2006年2月撮影



旧 1994年1月撮影

深川南部・臨海（仙台堀川以南）

老若男女が、行き交う街に

この写真は豊洲駅交差点より晴海通りを北西に望んだものです。上の写真は平成12年に写したもので、正面に日本ユニシス本社ビルが、ポツンとみえています。晴海通りの両側はコンクリートの壁に囲まれて、IHの工場や建物があります。下の写真は平成19年に写しました。豊洲駅前交差点の上には、「ゆりかもめ」が延び、豊洲公園はバスターミナルに整備され、交通渋滞が解消されました。晴海通り西側にはららぽーと



旧 2000年2月撮影



新 2007年1月撮影

豊洲ビルが建設され、いま話題の「キッザニア東京」などが開場しました。晴海通り東側には、芝浦工業大学が移転してきました。さらに平成19年4月に豊洲北小学校が開校し、以前には見かけなかった、ベビーバギーを押し、小さな子供の手を引く若い母親や、ランドセルを背負った子供の姿が数多くみられるようになりました。コンクリートの塀に囲まれた街から、高層ビル街へ。その周囲に植えられた緑の街路樹。学生の街であり、若いファミリー達が集う街に豊洲は変わりました。
（木村敏子、長公子、山本利）

城東北部（亀戸・大島）

4地区の架け橋完成

小名木川と横十間川が交わる場所を北から写しています。ここに大島・猿江・北砂・扇橋の4地区を結ぶクローバー橋が、平成6年12月に完成し、不便だったこの地域も今は縦横に人々が行き交っています。この橋の南には「東海道四谷怪談・隠亡堀の場」の舞台になった右井橋があります。



旧 1992年11月撮影



新 2007年11月撮影

工場からショッピングモールへ

京葉道路の南側を写しています。かつて亀戸の駅から見えた精工舎の工場は現在、新しいショッピングモール「サンストリート」として若い人々に親しまれています。西隣の緑道公園は昭和47年まで都電が通っていました。今は公園内に車軸と説明板があり、当時の面影がうかがえます。

（岩淵和恵、坂本住子、常澤愛子）



旧 1992年8月撮影



新 2007年11月撮影

城東南部（砂町）

東京メトロ南砂町駅前

地下鉄東西線は昭和44年に東陽町～西船橋間が全線開通しました。当時の南砂町駅の入口は西口と東口の2ヶ所でしたが、平成13年に南口（3番出入口）が完成し、エスカレーターやエレベーターも設置されました。また、都バスのターミナルも完成して、現在に至ります。2枚の写真は駅の南側に並走しているコミュニティ道路を「南砂駅前公園」交差点から日曹橋方面（西方向）に写したものです。開業当初は洲崎川から延び

旧 1998年12月撮影



新

る運河のコンクリートの護岸壁が連なっていました。後年に埋め立てられて、平成10年の写真（上）では南口の位置は駐車場になっています。平成19年の写真（下）と比べると、佐川急便の立体駐車場は変わりませんが、相互通行だった道が一方通行になり、駅の上には14階建ての高層住宅ができました。さらに駅南口周辺には順天堂東京江東高齢者医療センターや高層住宅ができ、街の風景は大きく変貌しました。南砂駅南側の9年間の街並の変化が定点観測調査でわかります。

（井戸勝朗、中村智幸、箕輪一夫）

新 2007年11月撮影



新

近代深川の商人たち

明治期の米商人

東洋大学文学部教授

大豆生田 稔

はじめに

日本人の主食である米。この米の取引と江東区とのつながりは、きわめて深いものがありました。「江戸の倉庫」であつた深川には多くの米商人が活躍していました。明治期に入ると佐賀町に正米市場が開かれ、米穀流通の拠点となりました。これから、明治時代における米取引の仕組みを見ながら、米問屋に焦点をあてて、深川の商人たちを考えていきたいと思います。

深川の米問屋

明治期の米問屋には米穀問屋と廻米問屋という2つのタイプがありました。米穀問屋は江戸時代からつづく一般的な問屋です。一方、廻米問屋は明治の初め頃に現れ、産地で大量の米を仕入れて米穀問屋と取引する巨大な問屋で、明治前期から中期の米の流通に重要な役割を果たしました。

江戸時代、全国各地から江戸に米が集まってきましたが、それらは大きく

2つに分けられます。まず、租税として領主に納められた年貢米が、その産地から江戸の蔵屋敷に送られてくるもの（「領主米」）、それから年貢米以外の米のうちの一部が、商品として市場で取引されて江戸へ運ばれてくるもの（「商人米」）です。

そして、江戸に集まったこれらの米は、米穀問屋を通して、精米し小売する市中の白米商へと流れていき、最終的に消費者に届けられることになりました。

ところが明治時代になると、廃藩置県や地租改正によって領主制が解体し、年貢米も消滅したため、米の流通は大きく変貌することになりました。領主が年貢米を、産地から江戸へ輸送するというルートがなくなったため、それを新たに廻米問屋が担うことになったのです。東京の近郊、すなわち関東や東北地方南部を産地とする米を地廻米といいますが、それらは米穀問屋が直接取り扱いましたが、北東北や関西・東

海など遠隔地の米は、廻米問屋によって取引され、米穀問屋に卸されるようになりました。

特に深川には大きな廻米問屋が何軒も店を構え、水運の利から全国各地の米が集まって、米流通の一大中心地として栄えることとなりました。さらに1890年代以降になると、遠隔地、特に九州地方との米の取引が盛んになり、また現在のベトナム・タイ・ミャンマーなど東南アジアからの輸入米も大量に入ってくるようになります。

廻米問屋の台頭

さて、豊富な資金や廻船・倉庫などの設備を有した大きな米穀問屋、また魚肥などを扱っていた有力な問屋たちが廻米問屋業に乗り出し、台頭していきます。大量取引のリスクを軽減する定期市場が整備され、取引・決済の方法が確立するなど、廻米問屋が活躍する条件も整いました。一方で、資金力や信用のない廻米問屋は淘汰されていきました。

その過程で、明治16年（1883）、主要な廻米問屋18名が同業者の組合である仲間組織を形成しました。その発起人には渋沢栄一のいとこの渋沢喜作（深川区万年町）、三井物産社長の益田孝、深川の有力な商人である奥三郎兵衛（同区堀川町）や中村清蔵（同区材木町）らが名を連ねました。

その後この仲間組織は、明治18年（1885）に「東京廻米問屋組合」となり、佐賀町に「東京深川廻米問屋市場」を開設することになります。同市場は現物の米を取引する「正米取引」の市場であり、中庭を囲んで回廊式になったフロアには事務所のほか、廻米問屋、仲次店（仲買）が並んでいました。ここにやってきた東京市内各地の米穀問屋たちは、仲次店を介して廻米問屋と現物の米を取引したのです。

この建物は震災で焼失しましたが、昭和2年（1927）、鉄筋3階建てのビルに建てなおされ、「食糧ビルディング」の名で平成14年まで佐賀町に現存していました。





食糧ビルディング 2002

深川の廻米問屋の横顔

さてここで、先述した廻米問屋の間組織の発起人であり、深川にゆかりの深い奥三郎兵衛と中村清蔵について、紹介したいと思います。

奥三郎兵衛は深川を代表する有力な豪商ですが、晩年には衆議院議員に当選して政界にも進出しました。煎茶道に精通し、また紀行文の著者としても有名です。塩原温泉に別荘「静寄軒」を構え、同地の紀行文『塩溪紀勝』を著しています。塩原新道の整備をおこなった三島通庸、塩原で『金色夜叉』を執筆した尾崎紅葉とともに、塩原温泉の名を世に知らしめた「塩原温泉三恩人」の一人にも数えられています。

また同じく、中村清蔵も有力な深川の商人ですが、地元で味噌醸造にも乗

り出しています。また、清澄にある中村中学校・中村高等学校の創始者として知られており、この地域の教育にも力を注ぎました。

米穀問屋の台頭

米穀問屋は、一般に資金力に限界があり、また大きな倉庫や船などももてず、廻米問屋の事業には参入できませんでした。しかし彼らも、明治中後期になると、遠方の産地とも直接取引できるようになってきます。

民間で銀行や倉庫業が発達してくると、中小の米穀問屋にも新たな取引のチャンスがやってきたのです。さらに、鉄道輸送が発達して、取引の単位が船一艘から貨車一台に小口化すると、米穀問屋は、廻米問屋を介さずに、産地と機敏に直接取引することができるようになってきました。

このような変化は、三井物産の理事会の議案『明治二十九年上半季 理事会議案』にある「三井物産会社深川出張店二関スル報告」（三井文庫所蔵）などによくあらわれています。深川で廻米問屋業を営んでいた三井物産深川出張所は、「今日ノ如ク交通機関已ニ発達シ、銀行業・倉庫会社ノ日ニ精ヲ加フルノ当時ニ至テハ、其業務ノ大半ヲ拳ケテ他ニ専ヒ去ラル、ニ至ルハ数ノ免レザ

ル処ナリ」と、廻米問屋を取りまくきびしい状況を述べ、撤退を申し入れるようになりました。

また、明治31年（1898）12月発行の『日本全国商工人名録』は、奥三郎兵衛の名前を廻米問屋としてではなく、肥料商として掲載しています。このように明治後期になると、廻米問屋が後退する様子が見て取れます。

日本銀行調査局『米の取引』（1932年）には「近來汽車積の発達のため、売買単位が次第に少くなり、…船積の時代には船繰の關係上一船少くとも数千石積載したため、自然時に多なる資本を必要としたが、汽車積にあつては一貨車さへ纏れば輸送し得るから運轉資金も極めて少額で足りることゝなつた。…産地より直接買入を行ふことゝなり、…」という記載からは、鉄道輸送の発達と荷口の小口化により、資金力の乏しい米穀問屋でも、直接産地からの仕入れが可能になったことがわかります。

こうして、江戸時代からつづく米穀問屋は、近代的な制度や機関が整うにしたがつて再び発展のきっかけをつかんだのです。同時に東京の米取引の拠点は、深川から鉄道の貨物駅に次第にシフトしていきます。

ところで、東京に着いた米は、重量

があるので船で輸送されました。このため貨物の到着駅はみな水路に接しています。例えば、もともと貨物駅であった秋葉原駅は、神田川に接していません。深川と並ぶ正米取引市場の神田川市場は、この秋葉原駅の間近にありました。東北本線沿線の産地の米が、鉄道によって大量に秋葉原に続々と到着するようになると、神田川市場は大いに発展していきます。この神田川市場には多くの米穀問屋が集まっており、明治末になると深川に迫る勢いで取引を拡大していくことになったのです。

この記録は、昨年10月4日（木）に行われた講演会の要旨です。



東京深川廻米問屋市場 場内（佐々木信義編『東京廻米問屋組合深川正米市場五十年史』東京廻米問屋組合、1937より）

江東区と海

このタイトルを見て、何を思い浮かべますか。東京湾に広がる埋立地、あるいは運河など、まずは現在も変化し続ける光景がイメージされます。高層ビルが林立し、高速道路が走る街の風景は、まさに都会そのものです。そして、臨海地域の開発とともに、海は次第に南下していきました。

しかし、今から100年、いや50年もさかのぼると、現在の江東区には、少し違った風景が広がっていました。遠浅の砂浜で魚介類や海苔の生産が行われ、食生活を支えていたのです。海が身近な存在だった当時、人々の生活は、海と深く結びついていました。

明治42年の古石場

明治以降の深川浜地域は、永代橋から門前仲町に至る永代通りのほぼ南部地域に広がっていました。通りの北側に位置する福住あたりも含みますが、

ほぼ永代一丁目から古石場にいたる地域と考えてください。そこには、昭和37年まで海を仕事場として漁業を営む多くの漁師やその関係者が居住していました。

まず、下段の絵をご覧ください。これは、『東京名所図会』（深川区・深川公園之部）に収録された「深川古石場町潮除堤の眺望」です。この絵を通して、まずは明治末の浜の様子を訪ねましょう。

絵の中央には、東西に高く築かれた堤があり、海から居住地が守られていたことがわかります。海側には、昔から変わることはない干潟の風景が広がり、一方の居住地側には、昔からの家並みが続く中、近代の象徴ともいえる工場煙突が2本立ち、黒煙を吐いています。

そのような、江戸と近代が入り混じる風景の中、人々の生活の様子もきちんと描かれています。天秤棒を担ぐ棒手振、あるいは梯子を肩に担ぐ植木職風の職人の姿も見つけることができます。

また、土手沿いの家では、囲碁（または将棋）を打つ2人の姿、その奥では髪結いの様子も描かれており、明治42年とはいえ、当時の古石場には、いまだ江戸時代と“同じ時間”が流れて



万祝(千葉県立安房博物館蔵)

いたように思われます。

そのなかに、浜の象徴的なものを探すと、土手を歩く人物が、背中に鶴を描いた「萬祝」を着ていることに気づきます。

。萬祝は、大漁のとき、網元などから漁師に配られたもので、のちには祝事するときなどに揃って着るようになったといわれます。その萬祝を着て、土手を歩く姿は、まさにここが浜であることを伝えていきます。さらに、工場手前の土手沿いには、二張の網が干してあります。漁師にとって、網干し場の確保は、魚を捕獲することと同様に、非常に重要でした。絵を見



『東京名所図会』（深川区・深川公園之部）より引用

る限りでは、家が建て込んだ状況のなか、横に広げる場所はほとんど確保できず、立てて広げる形をとったのでしよう。あるいは、このような干し方が、このあたりでは一般的だったのかもかもしれません。

このように、古石場を描いた1枚の絵の中に、明治末における深川浜の生活の様子を垣間見ることができました。

たった1枚の絵とはいえ、多くの情報が隠されており、絵のもつ「情報力」を感じます。そこには、浜を象徴する漁師や魚貝の販売などに関わる人だけでなく、さまざまな生活の風景がありました。その人々は、漁師たちが捕った魚介類の一部の消費者でもあったはずです。大正5年に深川区役所が刊行した『深川区史』には、そのことを端的に示す写真があります。「黒江町の魚市場」と題された写真がそれです。

黒江町の夕河岸

黒江町の魚市場は、現在の永代2丁目あたりに毎日開設されました。その写真には、次のような解説が記されています

黒江町の電車停留場の南側歩道に毎日午過ぎから魚の小買市が立つ。ここでは築地の市場から来る魚も扱ふがそれらと混つて地のものをも驚いでいる。不動の縁日などに夕方雑沓している中を縁喜ものをささげて蛤や浅蜷やシジミやさてはカレイやコチ等、時には生洲に泳がせているのを素見して行く有様は深川気分の濃厚な一つの場面

と見受けられる。

この文章は、『深川区史』(1926)の編さんに関わった人の手によるものですが、少なくとも80数年以前に行われていた様子を伝える、貴重な内容といえます。当時、この市は「黒江町の夕河岸」として知られ、まさに江戸前で捕った魚介類を昼過ぎから夕のうち販売することでも有名でした。文章にあるとおり、ここでは深川浦の魚なども扱っていたと考えられ、深川不動の縁日の雑踏のなか、夕河岸を横目に「素見」して行く様子が、いかにも深川らしい場面であると記されています。



黒江町の夕河岸(『深川区史』より引用)

蛤・浅蜷・シジミのほか、カレイ・コチなどを生簀に泳がせていた様子が目に浮かびますが、まさに深川不動の縁日の賑いととも深川の象徴的存在だったことがわかります。

しかも、この市は区史の出版当時、実際に開かれていましたので、この写真もまた貴重といえます。

写真左側の永代通りには市電が走り、その通り沿いに板を敷いて出店が並んでいる様子がわかります。手前の店を見る限りでは、板の上にザルを置き、その上に魚が2尾つつ乗せてあります。店には、水をためた大きな桶があり、その上にマナイタと包丁らしきものが置かれています。その傍らにいる人は、魚をさばいているようにも見えます。この写真だけでははっきりわかりませんが、その風体を見る限りでは、漁師のようにも見えることから、捕ってきた魚を漁師がそのまま売っていたのかもしれません。

ただし深川浜は、漁業に従事した漁師だけでなく、流通にかかわる人々も多く生活の場としていましたので、もう少し慎重に見極める必要があるでしょう。

このほか、深川魚市場も設けられていましたので、そのことについても少し触れておきましょう。

深川魚市場

深川魚市場は、「黒江町の夕河岸」とは別のもので、永代通り南側に位置した大島川(現在の太横川)沿いの大島町や中島町・蛤町(現永代1・2、門前仲町1付近)がその舞台でした。

深川魚市場が開設されたのは、明治13年(1880)でした。『東京都中央卸売市場史』によれば、深川区の「最辺端」の場所で、通行人も少ないため、その妨害にならないことや、土地の広い越中島に隣接し、自然衛生上の憂いもないため、東京府の許可が下りたといえます。扱った魚類は、タイ、クロダイ、カレイ、ヒラメ、サバ、ボラ、マグロ、カツオ、イワシ、エビなどで、貝類は、ハマグリ、カキ、シジミなどでした。これら魚貝類は主に仲買・小買に売られ、午前7〜8時頃には終市する状況だったようです。「夕河岸」同様、この魚市場も海との関わりが深い、深川ならではのといえるでしょう。

いまではすっかり様変わりした町の様子も、少し時間をさかのぼってみると、現代とはまったく異なった風景が広がっていました。本稿では、絵や写真素材に、江東区と海との関りについて、少しだけ考えてみました。

(文化財専門員 出口宏幸)

文芸と女性

12月20日(木)～4月20日(日)

男性中心の武家社会であった江戸時代、文芸も男性の教養、嗜みでした。その中で女性俳人たちは、女性らしい感性と才能を伸ばし、ユニークな人生を送りました。芭蕉の弟子であり深川で眼科医をしながら俳諧を続けた園女。九州下関に生まれ芭蕉の足跡をたずねて陸奥まで旅をした菊舎。奥州須賀川で俳諧を志し亡くなるまでに四千の作品を残した多代女など、当館所蔵資料のうち江戸時代中期から幕末にかけての女性の俳句の黎明を展示します。

明治維新によって、女性たちも表現の自由を知ることになります。子規から虚子へ引き継がれた「ホトトギス」では女性俳句の場が設けられ、長谷川かな女・星野立子・中村汀女・久保より江・本田あふひ等が出て女性俳句の流れを作り出しました。大正・昭和の女性俳人たちが切り開いた道は、山口波津女・鈴木真砂女・細見綾子・下田実花・加藤知世子・中村苑子らに受け継がれていきます。

また近代女性歌人の草分



芳年筆・都幾百姿 加賀の千代女図 (明治22年)



長谷川かな女・三浦環・与謝野晶子短冊

けである与謝野晶子、日本最初のオペラ歌手である三浦環、『放浪記』でベストセラー作家となった林芙美子、嘉悦学園創始者の嘉悦孝、女性として初の帝展特選を得た画家生田花朝女など、近代の思想家、作家、芸術家たちの資料も展示します。全62点の資料から、近世から現代にかけて、文芸に託した女性たちの心と生き方をじっくりとご鑑賞ください。(芭蕉記念館 中村美樹子)

文化財自主グループ。繁盛記

現在、区内には歴史や文化財などを勉強する自主グループが9つあり、それぞれ活発に活動しています。本号から各会の活動を順次紹介していきます。

江東区の文化と自然を愛する会
略称「愛江会」といいます。メンバーは教育委員会主催の文化財講習会修了者や文化財保護推進協力員などです。月2回の例会を中心に活動を続け、今年で7年目を迎えました。活動内容は、区に関連する歴史や文化、自然、庶民生活をテーマに各自が報告するクロマツと、江東区の材料が多い平岩三枝氏の『御宿かわせみ』を読み、時代背景や風俗を勉強するサザン力があります。

富岡八幡宮西側参道の入口の脇にバラバラになった鳥居が置かれているのをご存じですか。これはもともと八幡宮の正面参道入口に建っていた二ノ鳥居です。元治元年(1864)8月に町火消「二組」が奉納しました。その後、現在地に移築され、平成4年に新たな鳥居ができた時に解体されました。

ココにも歴史があった

この鳥居の側柱には下の写真のマー

今回、例会100回を記念して公開学習会を開きます。興味のある方は是非お越し下さい。入会も随時募集しています。

日時 2月11日(祝) 午後2時から
会場 教育センター12階第3研修室
(東陽2 3 6)

定員 30名(区内在住者限定) 無料

内容 歌川広重「名所江戸百景」に描かれた区内の名所を解説します。

*参加者には当日、『こつこつ文化財まつぶ』を進呈します。
『御宿かわせみ』文庫版28巻、佐助の牡丹』を題材に報告します。

申込方法 はがきに「住所、氏名、電話番号」を記入し左記までお申し込み下さい。定員超過の場合は抽選の上、案内状をお送りします(1月30日〆)。

〒135 0016 東陽2 3 6 514 福島浩之宛
*個人情報 は本学習会の連絡以外使用しません。



クが刻まれています。これは明治9年から11年の間に内務省地理局が測量のために刻んだ高低凡号(きこう)です。同じものが洲崎神社の波除碑にも刻まれています。(文化財専門員 赤澤春彦)